

京人形を楽しむための鑑賞ガイド



雛まつりと人形



雛人形を飾って女子の成長を祝う雛まつりは、古くから行われているように思われがちですが、人形を飾ってこの日を祝うようになったのは、江戸時代の初めとされています。

雛まつりの起源は、上巳の節供という三月のはじめに行われた祓いの行事です。そこでは、紙など簡素な素材で作られた人形が、穢れを引き受ける人間の形代として用いられていました。それがやがて、同じく三月三日頃に公家の女子たちが行っていた盛大なお人形遊びである雛遊びと結びつき、江戸時代には、飾るための豪華な雛人形へと変化していきました。

江戸時代の雛人形には、その時代の元号を冠して呼ばれる寛永雛・享保雛や、製作した人形師の名にちなむという次郎左衛門雛、江戸で完成した古今雛、公家の装束を正しく写した有職雛などがあります。

本年の「雛まつりと人形」では、近年発見された、古今雛の完成者とされる二代原舟月作とみなしうる古今雛飾りとともに、当館所蔵の京風古今雛を並べて展示いたします。雛人形に投影される当時の東西の好みをご覧ください。

特集展示 雛まつりと人形

— 古今雛の東西 —

2024年

2月10日(土)ー3月24日(日)

平成知新館(1F・2)

雛飾りの東西



雛まつりといえば、内裏雛に三人官女、五人雛子などの人形に加え、たくさんのお雛道具が幾段にも並べられた、雛段の光景が思い浮かびます。

この豪華な「段飾り」は、江戸時代の終わり、華やかな武家の雛飾りにならって、江戸（現在の東京）で完成したと言われています。江戸では、町人の女子が武家の奥向きに奉公することがありましたが、雛の節供には、近親者も屋敷の雛飾りを拝見することが許されました。大名家では、姫君の婚礼道具と文様も製作技法もまったく同じで、婚礼道具の縮小版ともいえる豪華な雛道具が見られます。このような華やかな雛道具を加えた飾り方が江戸の町人に影響を与え、「段飾り」が完成したと考えられています。

それでは京都や大坂といった上方（現在の関西地方）ではどのような飾り方が主流だったのでしょうか。上方では「御殿飾り」、つまり内裏雛が住まう御殿が最上段に置かれました。雛段は二段程度、豪華な雛道具は少なく、一般的には江戸ではまず見られないおくどさん（台所）や小さな食器が加えられます。残念ながら、現代ではこの飾り方はほとんど見られなくなりました。江戸時代の終わりに上方に生まれ、後に江戸



御殿飾り雛（部分） 祐森隆英氏寄贈 京都国立博物館蔵

で暮らした喜田川守貞の『守貞漫稿』もりさだまんこうによれば、上方の雛飾りは江戸よりも質素で洗練されていないように見えるけれど、これは女子に家事を習わせるためだ、と記されています。こんなところにも、実質的と言われる上方の教育方針が見え隠れするようです。

男雛と女雛

——右と左の不思議——

男雛と女雛の正しい並べ方はよく話題になりますが、左右両説とも根拠があり、どちらが正しいとは言えないようです。

内裏雛は、天皇と皇后の姿がお手本です。向かって右は男雛、左は女雛となります。そのため、伝統を重んじる関西地方では、現在でもこの並べ方が主流です。

しかし、明治時代を迎え、宮中に西洋式の儀礼が導入されると、それに倣って男女の占める位置が逆になりました。そのため、現在の皇室の規定に従えば、向かって右は女雛、左は男雛となります。一説には、昭和天皇の即位式の際に撮影された写真を参考に、東京の人形業界が雛人形の左右を置き換えたことに端を発し、この並べ方が関東を中心に広まったと言われています。

江戸の雛人形

―原舟月と古今雛―



今回、展示される二代原舟月作の古今雛飾り一式（写真1）は、二〇一二年に岐阜県内で発見されました。かつて飛騨地方随一の豪農といわれた杉下家に伝来したもので、①名工の作品であること、②大型であること、③内裏雛・五人囃子・随身が揃っていること、④状態が良いこと、以上の四点から、江戸製の雛人形を代表する稀有な作品として注目を集めてきました。

従来、その存在が確認されている二代舟月作の古今雛の多くは、女雛の裳に「古今亭原舟月」との署名がありますが、本作品の裳には見られません。また、本作品を収納する桐箱にも、署名や落款は見当たりません。それにもかかわらず、この作者を二代舟月と特定しているのは、作風上の特徴がことごとく一致しているばかりでなく、じつは男雛と随身に巧妙にその銘が隠されていることが分かったからなのです。

江戸幕府は奢侈禁止令の一環として、すでに一七二一年には高さ八寸（約二十四センチメートル）以上の雛人形を禁じていましたが、本作品はそれをはるかに超える大きさです。また、衣裳には高級な錦を使用するなど、見るからに贅沢な雛人形であり、いかに富裕な豪農といえども、これほどの一式を江戸の第一人者に発注し、所有することができたのだろうか、疑問に感じざるを得ません。通常、舟月作の女雛の裳にはあつさり水墨の若松図が描かれるか、淡彩の流水桜図が描かれる程度ですが、本作品の裳には、極彩色の緻密な松竹梅鶴亀図が描かれています（写真2）。こうした特別仕様かと思われる点も含めて、元来は大名家など貴顕の所蔵品だったものが明治以降に杉下家に渡ったのではないかと推測しています。

作者の二代原舟月は、一七六八年（？）に江戸神田の材木屋に生まれました。師匠の初代舟月（？～一七九一年）は、江戸日本橋十軒店に店を構



写真2 女雛の裳部分



えていた大坂出身の人形師で、著名な根付師でもあり、絵師として法眼の位に叙せられました。一七七九年から八六年頃に新型の雛人形「古今雛」を創作しましたが、のちに京都御所の紫宸殿を模した雛飾りを作ったため江戸払いになったといえます。この初代に師事した二代は、雛人形の顔にガラス製の目を嵌め込む玉眼技法を初めて採用した人形師といわれ、山車人形や仏像、神楽面などにも優れた手腕を発揮しました。

二代舟月によって大成された古今雛は、従来の「享保雛」などにくらべて容貌・姿態とも写実性に富み、江戸の人たちの嗜好に適して人気を博しました。また、この古今雛様式の雛人形は、同時代に活躍した江戸の人形師たち（仲秀英・川端玉山ら）も手掛けしましたし、一八四四年に二代舟月が没した後は、子息の三代舟月（二八六～九九年）をはじめ、多くの人形師が継承していきました。そのため、古今雛は現代の一般的な雛人形（内裏雛）の原型と紹介されることも少なくありません。

しかし京都では、江戸で古今雛が流行していた頃、それとは若干作風の異なる雛人形が流行していました。現在では、歴史的な人形の分類上、そうした雛人形も「古今雛」あるいは「京風古今雛」と称することがありますが、本来は、江戸東京およびその文化圏以外で作られたものは古今雛と呼ばれていなかったようです。一八五三年に京都で出版された『御手遊ひな人形の故実』によれば、京風古今雛の幕末当時における呼称は「親王雛」であったことが分かります。



写真3 古式親王雛 玉城芳江氏寄贈 京都国立博物館蔵



写真1 古今雛飾り 二代原舟月作

また、江戸での古今雛の流行を受けて、京都で同様の雛人形（京風古今雛）が生まれたとの説もありますが、その論拠は定かではありません。本展出品の京都製の古式親王雛（写真3）のように、京都でも十八世紀後半に新様式の雛人形が作られていたならば、それは江戸の古今雛の影響とはにわかに断定できないことです。殊に、王城の地であり、古くから雛人形製作の先進地であった誇り高い京都の人形師が、簡単に江戸の流行に追従したとは考えにくいでしょう。むしろ、初代舟月が大坂出身であったことを考慮すれば、すでに存在していた京都製の親王雛を江戸風にアレンジした結果が古今雛だったのではないかとさえ思えるのです。

江戸の古今雛様式は、たしかに明治・大正・昭和と受け継がれてきましたが、昭和三十年代以降は関東・東海製の雛人形の多くが高級感を求めて京風化していきました。女雛が宝冠を被らず、頭髮を大垂髪として平額を着け、単から両手を出して檜扇を持つ姿は明らかに江戸の古今雛とは異なります。その一方で京都製の親王雛が、素材・技法・様式と、いずれも幕末から大きく変化することなく継承されてきた事実を思えば、現代雛の原形は、幕末の京都製の親王雛であるというべきでしょう。

ともあれ、古今雛を大成した二代原舟月自身による作品、いわば真正正銘の古今雛が展示される機会はそう多くはありません。雅やかな京好みとは異なる、艶麗な江戸の美意識をご堪能ください。

次郎左衛門雛 じろうざえもんびな

京都の人形師・雛屋次郎左衛門がつくり始めたと言われる、丸顔に引目・かぎ鼻・おちょぼ口のおっとりした面貌の雛人形。18世紀後半には製作されていたようです。大名家や、公家の子女が入寺する門跡尼寺に伝えられる作例もあります。



古式親王雛 こしきしんのうびな

享保雛の流行の後、実際の公家装束に配慮しつつ、18世紀半ば以降に京都近辺で製作されたと考えられる雛人形。一般的には目にしない当館独自の分類名称ですが、大型の特製品で、京都の旧家に伝来しました。



古今雛 こきんびな

江戸の名工、二代目・原舟月が大成したと言われる、江戸生まれの雛人形。安永年間（1772～1781）からつくられ始め、江戸での流行を受けて上方の雛人形にも影響を与えたと考えられており、当館ではこれらを京風古今雛と呼んでいます。実際の公家装束にならうものの、京風古今雛では女雛の袖口に刺繍を加えるなど、より豪華に仕立てられています。主に町方で飾られました。



イラストは京風古今雛

有職雛 ゆうそくびな

装束に明るい公家の監修のもと、公家や武家のために製作された特別注文の雛人形。有職とは、宮中にまつわる伝統的な儀式や行事にともなう知識をいいます。髪型・装束の色目・文様など、忠実に公家の装束を再現しようとするのが特徴です。



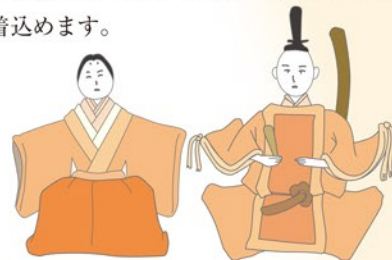
立雛 たちびな

三月三日に人形を飾る雛まつりの始まりとして、人間のけがれを木や紙でできた人形に移し、川や海へ流す祓いの行事があります。自立できない立雛は、けがれを移す人形から発展したと考えられ、飾ることを目的としていなかった初期の形式を伝えています。



寛永雛 かんえいびな

江戸時代前期（17世紀）の古風な雛人形。高さは10cmほどで、坐雛の初期の例のひとつです。男雛は頭と冠を一緒につくり、髪の毛と冠は墨塗り。女雛は両手を開き手先をつくらず、小袖を袴に着込めます。



古式享保雛（元禄雛） こしきしょうほびな（げんろくびな）

寛永雛よりもやや大きな雛人形。男雛のつくりは寛永雛とほとんど変わりませんが、女雛には手先がつき、装束も十二単風の襦装束になります。



江戸時代

- 〔寛永年間〕
(1624～1644)
- 〔元禄年間〕
(1688～1704)
- 〔享保年間〕
(1716～1736)
- 〔安永年間〕
(1772～1781)

明治時代

* 雛人形の名前についた元号は分類名称です。製作年代とは必ずしも一致しません。

享保雛 きょうほびな

江戸時代中期（18世紀）に町方で大流行し、その後も長くつくり続けられた雛人形。面長で端正な顔立ちで、50cmにもおよぶ大きなものもあります。毛髪は毛植えになり、公家装束を模した金襴の装束を身に着けます。





御所人形 着衣春駒持 京都国立博物館蔵

御所人形 ごしょにんぎょう

木彫りに胡粉を塗り重ねて磨き上げ、三頭身のあどけない幼児の姿を写した人形。明治時代以前には、その白く美しい肌から白菊、あるいは白肉、頭の大きなところから頭大、扱った人形問屋の名前から伊豆蔵人形などと呼ばれていました。初期には子どものあどけない仕種を写すのみでしたが、やがて組み合わせて物語や場面を表現するようになりました。

京人形

いろいろ



江戸時代には、雛人形のほかに、さまざまな人形が誕生しました。その多くは、ここ京都が発祥の地と考えられています。

衣裳人形 いしょうにんぎょう

衣裳をまとった胴体に、頭部や手先を加えた形式の人形。子どものかわいらしい仕種を写したものや、婦女・遊女・若衆などの風俗を写した浮世人形、能の舞台姿そのままの能人形などがあります。



衣裳人形 太夫坐姿 入江波光コレクション
入江西一郎氏寄贈 京都国立博物館蔵



賀茂人形 恵比寿大黒 廣海春木氏寄贈 京都国立博物館蔵

賀茂人形 かもにんぎょう

柳や黄楊を素材にした小ぶりの木彫りの人形で、顔や手足は木地を生かし、衣服には縮緬や金襴などの裂を木目込んでいます。こまやかな刀さばきをみせる顔と、着衣の裂とが調和し、素朴な味わいがあります。賀茂人形の主題は多様ですが、いずれも明るく楽しい表情に満ちています。

長い年月を生きている人形には、汚れや傷みがありますが、人形の重ねた歴史の重みとしてご鑑賞ください。

◆ 関連土曜講座

3月2日(土)「古今雛は現代雛の原形か?」 講師: 林 直輝 (日本人形文化研究所所長)

※平成知新館 講堂にて午後1時30分~3時に開催。定員200名、聴講無料(ただし、当日の観覧券等が必要)。

※当日9時30分より、平成知新館1階インフォメーションにて整理券を配布し、定員になり次第、配布を終了します。